

## ハッカ物語り

ハッカについての歴史的記録は、「佐呂間町史」又は、各地域の「郷土史」等に詳しく書かれていますので、何処から何時どうやって佐呂間に来たか等のことは省きます。

大正時代から、昭和一〇年代の大戦が始まって、食料増産に畠の殆んどがなるまでの、ハッカについての話ですが

先づハッカは投機的な作物でした。その日その時間で、相場が変り、農家の人が、今日の相場で売った翌日ぐんと高くなったり。今日は売らずもう少しの間、持っておろるか等を考えていたら、段々と相場が下落する等の、ハッカ耕作者の秋は、一喜一憂でした。

ハッカは、金になる時点で荷物が嵩張らず一斗罐（一八立）に一、二組、二、四斤入って、一組いくらと相場の単価を言った。一組が米二俵分三俵分の値段に上ったり、半俵分の値段に下ったりしたのだ。

一斗罐に入るハッカは、取卸油で液体なのである。秋刈穫って、はぎ掛けして干燥させ、大きな蒸籠で油を蒸溜させたら収穫。

大正時代から、扇（かねたつ）という神戸商人が、中佐呂間や武士市街に、出張所をおいて買い集めたが、雑穀仲買人も大いにハッカを買い集めた。面白い話がある。

大東亜戦争始まる前の一般の農家は、ラジオもテレビも殆んどなく、ハッカ相場は、新

聞か、市街地に在る中買人に聞くしか判らない、中買人には、神戸、大阪、横浜とかの大手資本家の手先になっていたのもいたので、真実の相場等知らせるよりも、高く言ったり安く言ったりして、ハッカ農家の秋を、ゆさぶりかけるような作戦を考えての、掛引ばかりであったようだ。

こんな話がある。開拓に入ったある農家で、数年輕でも仲々楽にならないので、住宅は着手小屋のまま間仕切もないま、表戸を開けたら。家の中は一目で判ると言う家。

ある年、耕地全部にハッカを植えたら、幸運にも豊作の上高値。金の都合で秋早くに一罐売って。米を買い囲炉裏を止めてストーブを買ったりして、あとの沢山あるハッカ全部売ったら家を建てようか等と、家内中で話し合っただけに上る。ある日ところが潮時と残り全部売った。

その親父さん生れて始めて手にした大金。体がふるえる程何んとも恐ろしくなり。家に馬車で帰ったら夜中になった。さあこの大金を何処に仕舞おうかと迷った。市街で嬉しさのため初冬の頃なので冷え込む季節なものだから、コップ酒二・三杯呑んでもいたりして。

ふと目にしたのは、開き戸のついたストロブ。「あつ、明日の朝までこの中に隠しておこう、朝おきて火を焚き付ける前に出せばよ

い、泥棒が来てもここなら気が付くまい」と、今年一年間の家内中の汗の結晶を。秋口に買った新しいストロブの中に仕舞って、沢山ハッカが罐あったので、その日のハッカを売る決心したのは、もう夕方になっていた、金輪の馬車にハッカの入った罐を積んで出かけた時はもう日が暮れていたストロブに大金を仕舞って。馬を馬車からはずし、馬小屋に入れ飼い馬をやって寝たら可成り遅い夜中であつたからよく寝込んでしまった。

この家には、息子等娘等が小学校六年で卒業してからも何処にも行かず、家業を真面目に手伝うよい子ばかり。朝早く起きた長女は朝食の仕度でストロブに薪を入れて、火を焚き付けたときは、親父さんは高野であった。（注、この話は、北見地方何処の市町村でも昔語られていたというが、子供の頃の話でした。）

### もう一つの話

ある年の秋、ハッカ相場が一組米一俵程の値段から、仲々上ろうとしない。昨年の値段のよかつた味を占めている各農家は。ジリジリして来る。

あるハッカ農家の夫婦が  
「父さん、米も買わなきゃならないしよ、寒くなって来たのに、子供等やわたしも綿入れの着物や、メリヤスのシャツなんか買わねえよ。どうだい、何時まで経っても、ハ

ツカの値段よくならないから、もう売ろうよ」  
嬢あちゃん悲鳴上げたのだが、父ちゃんは、  
「今日まで待ったのだ、も二・三日待つて見るべ」と答えた。

翌日になって、ぐっと値段が下った。さあ  
大変、嬢あちゃん怒るの怒らないの

「だから父ちゃんは、何時もわたしの言う  
ことを聞かないから、ドジばかり踏んで、う  
ちは何時も貧乏ばかりするんだよ」  
それから、その家は嬢嬢天下になったと  
言う話もあった。

これからの記事は、佐呂間町内で、資料が  
見つからずでしたが、佐呂間の開拓当時の農  
家も、悪い資本家に、この様な目に合され  
ているはず。

(徳永 良行)

資料提供者、オホーツク資料館 伊藤公平  
氏「オホーツクのハッカ」II遊佐幹夫著

もう一人提供者 当時「月刊あるふあ」社  
社長II砂田明氏、氏の著書「北の華薄荷物語」

ハッカは、開拓当時の佐呂間を含めて、北  
見地方の農家の重要な作物であった。佐呂間  
町開基百年目が来る今、心ある人の花畠に植  
えられているのがある位でせう。

この当時は、交通機関の上では尤も僻地の  
北見地方に。販売するとき嵩の少いハッカが  
適していて、明治からの開拓農家は、大変に  
ハッカに助けられたが、この開拓農家の血と

汗の固りに寄生虫のように、開拓農家の血を  
吸い取った資本家を並らべて見ませう。

屋号

業者名

所在地

園(かくまん)

小林商店

横浜

扇(かねたつ)

鈴木合名会社

神戸

①(まるじょう)

多勢商店

横浜

ウインクレス商会

神戸

この頂上に位置するのが『大本営』で、横

浜や神戸にある精製工場、販売元がそれであ

った。そこから地方に派遣される出張員が、

『大本営参謀』その下に現地採用の『師団長』、

『大隊長』、『小隊長』が配属され、更にその

手足となって暗躍するトンビ(斥候)までい

ると言うものであった。

参謀が現地に入ると、すぐさま各地の師団

長が呼び寄せられる。そして、料亭などの奥

深い一室でひそかに作戦会議を開き、ハッカ

農家からいかに搾取、収奪するか、じつくり

と秘策を練るのだ。まずトンビの情報がもた

らされ、逐一検討される。事前に師団長の命

令を受け、各地に放たれたトンビは、もっぱ

らハッカ農家の懐具合を調べているのだ。菜

種や小麦を売った金はまだあるか、越中富山

の薬売りはもう集金に来たか、役所の納税告

知書の配布はあったか、などと微に入り細に

うがった報告である。

農家に現金のなくなった頃合いを見届ける

と、「よし今だ！」と一斉に買い叩きに出る

のだ。各師団長は、大隊長以下に電報を放つ。

それも、電文をさかさにと打ったり、暗号もど

きであったりと非常に手が込んでいる。こう

して、黒い吸血鬼の様な軍団は、その触手を

不気味に揺らしながら、一斉に動き出す。そ

の買い方が実に巧妙なのである。

たとえ闇協定価格が「七円八〇銭」と決つ

たとしよう。そうすると、買いに出た日から

三日間位は「七円八〇銭」で買う。だが、

四日目は「七円七〇銭」、五日目は「七円六

〇銭」と日を追うごとに各社揃って下げ始め、

最後には、七円でなけ

れば買わないと強硬な

態度に出る。つまり、

農家の焦りを誘う作戦

なのだ。農家の方は、

成り行きをゆっくり見

届けてからなどと思っ

ていると、蟻地獄のよ

うな罠にはまり、つい

には捨て値で泣く泣く

買い叩かれるのであつ

た。

(右の記事は明治時

代である)

業者の中にも、思惑

掛引があつて、『山岡

商会』と言う業者が、

単独で北見地方に進出

一組六円五十銭の闇協

定価格を無視し、それ



ハッカ刈り風景

より二〇銭高の六円七〇銭で買いあさったのだった。これにより闇協定組五社の足並みが乱れ、対抗上、各社ばらばらに協定を破り、エゴむき出しにして買いつけ競走に狂奔し始め、価格は一二円六〇銭まで高騰した。

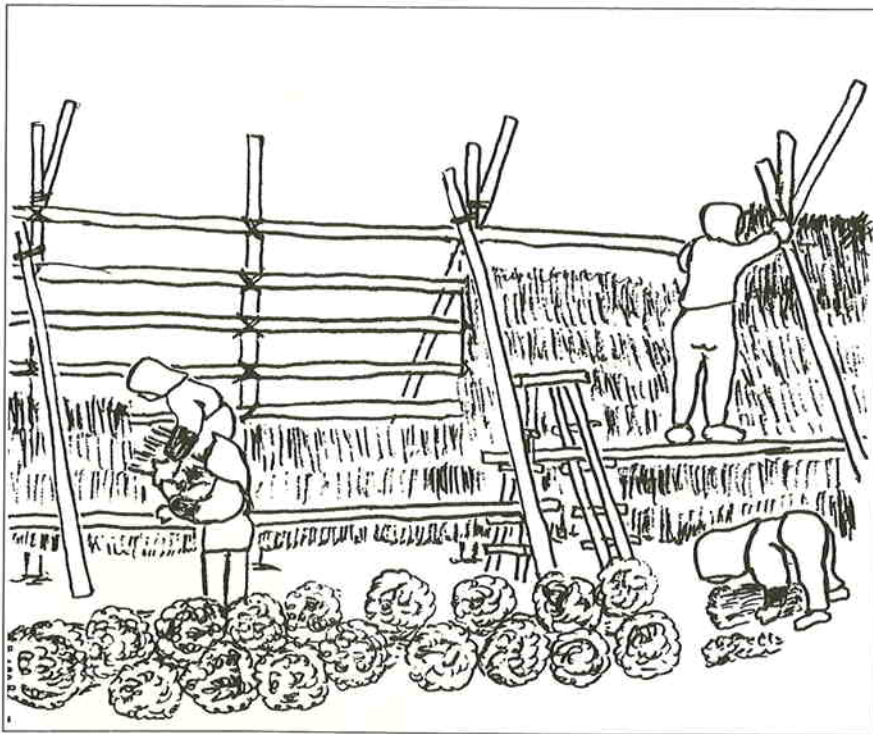
謀略が入れ乱れ、『ヤミ買い』が横行。この年は農民達はしこたま儲けたが、その翌年山岡商会は掌を返したように、闇協定組えの仲間入りした。山岡商会は儲けるだけ儲けたら、やはり強力な商売敵の五社を、何時までも敵にしている、何をされるか判らぬと考え闇価格協定組の仲間に入った方が、価格を安くして利益を上げられると考えての結果であった。団結心のない乏しい農民は、秋の収穫まで待たれず、市街地で悠々と暮らす仲買りに、作物の青田売り等して、春から夏ごろのうちに借金をしてしまつて、秋の収穫が豊作であっても苦しむ者が多いのであった。それが一度、大凶作にでもなつたらさあ大変、結局夜逃げをしてしまつて、家族そろつて行くえをくらすとすることになる。昭和の六年、七年、九年、一〇年と八年を除いて四年連続の大凶作のあつた年、私の生れた家の近くの人で三戸夜逃げをしたが、その三戸共に小学校の同級生がいた。今も名前は忘れていませんが、特別心掛けのよい農家は別ですが、佐呂間開基百年を祝う現在の、大きく改革されたあらゆる制度によつて、生活は安定されていることは改めて言うまでもありません。今はもう、作物として扱かわれなくなつた

ハッカ、開拓当初は重要な佐呂間を含めて、北見地方の特産物。世界中の需要の大半を生産したハッカ、佐呂間も関係あつたことで記事にしました。

『北の華薄荷物語』『オホーツクのハッカ』

この二書の中に、ハッカに関しての、サミエール事件等、農民の団結心になかつた悲劇のよなものの外、転載したい記事がありますがハッカ物語はこれにて中止致します。

文責 徳永 良行



ハッカはさ掛け風景